

総合討議の総括

統一テーマ「ロマンス諸語における時制・アスペクト・叙法」

川上 茂信（とりまとめ）

1 はじめに

日本ロマンス語学会第54回大会の統一テーマは、「ロマンス諸語における時制・アスペクト・叙法」であった。この枠内で Lucila Gibo、山村ひろみ、鳥越慎太郎、福嶋教隆、渡邊淳也、岸彩子、Cespa Marianna（敬称略、以下同様）による7発表（持ち時間20分）が行われた。Gibo はブラジル・ポルトガル語の迂言表現の3種類について副詞との共起関係をもとにした分析、山村はスペイン語の迂言形式 “estar+gerundio” の本質的機能、鳥越はポルトガル語の接続法現在と接続法未来について副詞節や関係節における差異のコーパスに基づいた分析、福嶋はインフォーマント調査をもとにしたスペイン語圏における-ra形と-se形の接続法過去形の差異、渡邊はフランス語の半過去形について事象を眺望する視点を時間軸上に位置づけた「叙想的時制」としての分析、岸はフランス語の直説法現在形の用法のひとつとして複数の事象を一度に考慮に入れ判断の対象とする述べ方があることについての分析、Cespa はイタリア語の時制の一致に関して言語学的視点と語学教育の双方の視点からの考察をそれぞれ論じた。このうち Gibo、山村、鳥越、福嶋、岸の発表は論文として本号に掲載されている。

2 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と、それをめぐって行われた討議の概略を記す。

(1) Lucila Gibo「副詞(句)との共起関係から見たブラジル・ポルトガル語の迂言形式EG, TP, AGの違いについて」

ブラジル・ポルトガル語には助動詞が現在形をとると反復を表す「estar+gerundio」(EG)、「ter+participio」(TP)、「andar+gerundio」(AG)の3つの迂言形式がある。発表では、これらの形式について先行研究からその歴史的経緯の一部を示し、さらに、副詞との共起関係などを根拠にこれら3つの形式の現代語でのアスペクト的特徴と使い分けについて述べられた。いずれの形式も、歴史的には継続を表していたものが反復の意味も表現するように

なつたと推定されるが、EGは基本的には継続を表す形式で、反復を表すには副詞句の共起が必要である。他方、TPとAGは現代語では反復の専用形式で、出来事が開始した過去の時間が限定されるが、EGはそれを限定しない。更に、EG、TP、AGは出来事の開始時から現在までの期間の長さにおいて異なり、場合によってはマイナス評価を含むことがあるという。

総合討議では、特に歴史的経緯に関連して反復がある段階から現れてくることについて質問があった。また、「反復」という用語が習慣的反復を示すのではなく、経験を表すことに注意を促す発言もあった。ポルトガル語の迂言形式の多さ・使用頻度の高さがロマンス諸語の中で特に際立っているという指摘もあった。

(2) 山村ひろみ「スペイン語の迂言形式 “estar+gerundio”の特徴とその本質的機能」

スペイン語の進行形“estar+gerundio”は直前過去を除くすべての時制で用いられ、いわば各時制のスコープに入る事態命題のひとつであるが、実際の使用ではatelicな活動動詞で現在形が比較的多いという。発表では、山村(2000a)をもとに進行形の本質的機能を示したのちGarcía Fernández (2009)のprogresivo, destelizador, durativizador, dinamizador, continuativoという5つの価値 (valores) が検討された。García Fernández (2009)は進行形を動的に解釈される時間的狀態の連続と考えているが、活動という点に主眼があるため、状態動詞で進行形が出てくる例についての考察が不十分であり、この点は山村(2000b)で提案されているように進行形を当該事態の成立の連続・累積と見ることに修正すべきであるとする。

総合討議では、反復、特に状態動詞における反復とはそもそも何を意味するのかなどについて、特にスペイン語でのserやestarと関連で議論があった。

(3) 鳥越慎太郎「ポルトガル語の接続法未来 -コーパスに基づく接続法現在との対照」

ポルトガル語は接続法未来が依然として使用されている言語であり、特に接続法現在とは選択的な文脈を構成することがあるが、学校文法では必ずしも十分にその違いが説明されていない。発表では、Comrie & Holmback (1984) の時間の副詞節表現では主節と副詞節の時間関係によって、関係詞節表現では先行詞と冠詞や指示詞との共起関係と文脈情報によって接続法未来と接続法現在が使い分けられるとされる主張をコーパスに基づいて検討した結果が示された。それによると、時間の副詞節表現の一部にComrie & Holmbackの説明とは矛盾するものがあるという。

総合討議では、そもそも接続法未来は接続法なのか、Comrie & Holmbackの説明と矛盾するとして挙げられている表現は、必ずしも時間表現とは言えないのではないかという指摘があった。

(4) 福嶋教隆「スペイン語の2つの接続法過去について」

スペイン語には、接続法の過去形としてラテン語の直説法過去完了に由来する-ra形とラテン語の接続法過去完了に由来する-se形という2つの形が共存している。-ra形と-se形は一部の用法を除いて同義であるとする説が大勢を占めるが、意味が異なるとする説もある。発表では、ロマンス諸語における接続法使用を通言的に概観するとともに、特に接続法過去についてのイベリア半島の他のロマンス語での状況を確認したのち、スペイン語圏の母語話者を対象に実施したインフォーマント調査が示された。その結果をまとめると、①通説に反してラテンアメリカでも-se形を用いる話者が少なからず存在する。②確かに-ra形、-se形を同義と判断する話者が多いが、両者の間に意味的、機能的差を認める話者の存在も無視できない。③ただしその違いは対立と言うより程度の差と言うべきものである。

総合討議では、発表そのものよりも、ロマンス諸語における法、特に接続法や条件法など、また規範と実際のずれなどについて広く議論された。

(5) 渡邊淳也「フランス語半過去形と『叙想的時制』」

時制の機能は、「動詞があらわす事行 (*procès*) を時間軸上に位置づけることである」が、それとならんで、事行を眺望する視点を時間軸上に位置づけている時制の用法があると考えられる。このような用法は「叙想的時制」(*temps de dicto*) とよばれ、もうひとつの重要な機能である。発表は、フランス語の半過去形の「モダールな用法」として従来扱われていたものを「叙想的時制」の概念から再解釈する試みで、叙想的時制として①廃棄された予定を表す半過去、②追悼の半過去、③接客の半過去、④愛玩の半過去、が、さらに「叙想的アスペクト」の例として⑤絵画的半過去、⑥結末の半過去、⑦説明の半過去、があるとされ、このような「叙想性」と未完了アスペクトとの親和性は、現実世界に支えられた「叙事的」な時制に対して、「叙想的」用法は擬似的体験にその根拠があるからではないかと推論された。

総合討議では、「絵画的半過去」という概念の叙想性をどのように説明するか、その困難についての議論などがあった。

(6) 岸 彩子『かいつまんで言う』ときの時制 —フランス語直説法現在形

フランス語では、あるエピソードの概要を述べるときに用いられる直説法現在形があるという。過去形での概説の例もみられるので、現在形の使用が絶対的ではないと言えるが、では過去形とはどのように違うのか、さらに、この現在形は、いわゆる語りの現在とも異なるので、この違いはどこから来るのかという問題がある。発表では、フランス語の現在形自体には時間性はなく、組み合わせられる領域に依存して時間の事態を表す現在形非時間性説と取り、領域として、一時点に限定されたものと、一時点に束縛されないもの、IモードとDモード（中村2009）の対立に重なるものを想定しながら、フランス語の現在形のさまざまな用法を、特にアガサ・クリスティーの小説の仏訳本のテキストを出発点にしながら展開した。この現在形は、個々の出来事をその場に視点を置いて表す、Iモードの述べ方ではなく、複数の事象を一度に考慮に入れ、これらを判断の対象とするDモードの述べ方であり、複数の出来事が全体として一つのまとまりをなすことが意識されることになるという。

総合討議では、パラレルコーパスにおいてこの現在形に対応する他のロマンス語での形はほぼ過去形であったが、ポルトガルのポルトガル語のみ現在形で対応していた例があり、通言語的比較も今後の課題であろうという指摘があった。

(7) Cespa Marianna 「イタリア語における時制の一致に関するルールの習得について—過去分詞とその「完了性」を中心に」

イタリア語の主節と従属節の動詞の時制の一致には時間的な相関関係だけでなく、意味や表現のタイプや文章構成など様々な要因が関与するので、学習者にとっては習得の難しい領域であるという。発表では、言語学的視点と語学教育の視点の双方から、a)正確な時制形式の選択のための考察のポイントは六つであること、b)時制形式の用法が複文の種類により異なること、c)学習者の複合時制に伴う「完了性」に対する理解が不十分であること、の三つの論点からこの問題が考察された。時制の選択をする際に考察されるべきは、主節における動詞の性質や、主節と従属節における動詞の時間的な相関関係のみではないということを明らかにされ、さらに、複合時制の過去分詞における「完了性」とその機能が時制選択と用法にとっては重要であり、テンスの視点のみではなくアスペクトの視点も重要であると主張された。

総合討議では、日本語の形容詞などにはイタリア語にした時、完了と未完のいずれにも対応するものがある（è stato buono / era buono）ので、実際の教育の場では学習者に配慮

した工夫が必要であろうなどの指摘があった。また、従属節における直説法未来、接続法現在、条件法の使用についてロマンス諸語対照の観点からの質問があった。

3. まとめ

今回の統一テーマは、時制・アスペクト・叙法というかなり大きなテーマ設定であった。実際、そのそれぞれがすでに大きなテーマを構成するもので、全体としてのまとまりを問うにはやや無理がある。しかし、発表は、迂言形式（2名）、接続法（2名）、半過去、現在形、時制の一致など、それぞれロマンス語学的に興味深い内容をカバーしたとあってよい。大雑把には共通の体系を持っているように見えるロマンス語の動詞体系だが、実際の使用においては様々な相違が観察される。その点についての確認ができたのは収穫であった。出席者の関心も高く、総合討議においては極めて活発な議論が展開された。ただし、発表は7名とにぎやかではあったが、取り扱われた言語はポルトガル語、スペイン語、フランス語、イタリア語と限られていた。

フロアからの問題提起としては、条件法（スペイン語・ポルトガル語では直説法の形式として扱うのが普通）が取り上げられなかったこと、gerundio に当たる日本語の用語（「現在分詞」は不適切である）を統一することはできないか、などがあった。いずれも通言語的な考察が必要なテーマで、今後の研究へのヒントともなるだろう。